

研究論文

化粧規範に関する研究  
—社会的場面で施す化粧程度の構造と個人差要因との関連性—

平松 隆円\*

Study on Makeup Norm

—The relationship between the constructs defining the degree of makeup used in a social setting, and the primary factors that cause individual differences—

Ryuen HIRAMATSU\*

Abstract

People assume lifestyles, values and systems that are appropriate for members of the groups to which they belong as they venture through life. Cosmetics are also subject to this phenomenon, and as such, people apply cosmetics in certain ways according to circumstances.

The purpose of this study is to examine the relationship between actual behavior and the tolerance of society in general with regard to the degree of makeup use in a social setting. It clarifies the basic construct of makeup, in terms of what is deemed to be important in a social setting. And, it also examines the basic construct of makeup that specifies people's behavior concerning its use in a social setting. Furthermore, this study examines the relationship between the primary factors that cause individual personal differences such as self-consciousness and other-consciousness, examined during research into the relationship between behavior and consciousness with regard to makeup, and the actual degree of use in a social setting.

A summary of the results obtained is listed below.

1. The degree of makeup used personally and the degree of makeup used by society in general were both constructed into a “public setting” and “private setting”. The basic construct of makeup can be divided into “individuality”, “social harmony” and “conformity to others”.
2. For both men and women, the degree of makeup used by society in general in a “public setting” specified the degree of makeup used personally in a “public setting”. Similarly, the degree of makeup used by society in general in a “private setting” specified the degree of makeup used personally in a “private setting”.
3. For men, the basic makeup component of “individuality” specified the degree of makeup used personally in a “public setting” and “private setting”. For women, the basic makeup components of “individuality”, “social harmony” and “conformity to others” specified the degree of makeup used personally in a “public setting” and “private setting”.
4. For men, high public- self-consciousness decided the degree of makeup used personally in a “public setting” or “private setting”. For women, high external- other-consciousness decided the degree of makeup used personally in a “public setting” and “private setting”.

(キーワード 化粧規範：makeup norm, 化粧行動：makeup behavior, 化粧基準：standard makeup, 自意識：self-consciousness, 他者意識：other-consciousness, 男女差：difference between male and female)

\*国際日本文化研究センター 機関研究員（講師）  
京都大学 中核機関研究員

## I はじめに

人は生きていくなかで、その集団の成員としてふさわしい生活様式、価値、制度を身につける。それは化粧も同様であり、それゆえに、人は状況に応じて一定の方法で化粧を行う。つまり、社会的な場面で化粧行動を規定する行動や判断の基準としての化粧規範が、人々のあいだで存在している。

化粧と関連する衣服については、これまで中川<sup>1) 2)</sup>、西藤・中川<sup>3)</sup>、被服社会心理学 (SPC) 研究会<sup>4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13)</sup> などをはじめとして、着装規範の研究が行われた。

例えば、福岡・高木・神山・牛田・阿部<sup>4)</sup> が生活場面と着装基準の関連性について検討している。それによると、人々が生活場面で着装する衣服を選択する基準を、着装基準 (『個性・流行』『実用性』『社会的調和]) と捉え、衣服が生活場面で果たす機能により、各場面 (『フォーマル』『セミフォーマル』『インフォーマル]) にふさわしいと思われる基準に従って衣服を選択して着装していることが明らかとなっている。

したがって、被服行動として衣服と密接に結びつく化粧についても、何らかの基準が様々な場面での化粧行動の程度に関連していると仮説できる。しかしながら、これまでの着装規範に関する研究ほどに、化粧規範については検討がされてこなかった。

そのようななかで、平松<sup>14)</sup> は「公衆場面での化粧行動への社会的是非と個人差要因」について検討している。それによると、公衆場面での化粧行動や社会的是非は特定・不特定の他者の存在や状況の公私によって構造化されていること、不特定他者がいる比較的公的な場面で社会的にも化粧をしてよいと考えている者は特定・不特定の他者の存在に関係なく化粧行動を行っていることなどが明らかとなっている。また、平松・牛田<sup>15)</sup> は「化粧を施す生活場面とそれを規定する化粧意識と個人差要因」について検討している。それによると、対人接触や状況の公私の高さにより化粧を施す生活場面が構造化され、男性では必需品・身だしなみが、女性では魅力向上・気分高揚、必需品・身

だしなみ、効果不安が化粧を施す生活場면을規定していることが明らかとなっている。

しかしながら、化粧規範が化粧行動に関する人々のあいだで暗黙のうちに共有されているルールであるにもかかわらず、社会的場面における実際の化粧程度と世間一般として、どの程度化粧を行うべきかという意識との対応関係が明らかにされていない。すなわち、子どもやある社会への新規参加者が、その社会固有の文化、価値、規範、行動様式を身に付けることを「社会化」とよぶが、生活場面における実際の化粧程度は世間一般の化粧程度が社会化された結果、表出していると仮説できることから、実際の化粧程度と世間一般の化粧程度の対応関係を検討する必要がある。

また、多様な場면을対象として、そこで行われる化粧行動において何が基準として重視されるかについては、まだまだ検討の余地がある。

そこで本研究では、平松・牛田の研究<sup>15)</sup> をもとに、若者を対象として質問紙調査を行い、次の点を明らかにすることを目的とした。

1. 化粧を施す社会的場面での化粧行動の程度に関する、実際の行動と世間一般の許容の程度の対応関係について検討する。
2. 化粧を施す社会的場面での化粧行動とそこで重視される化粧基準の構造を示し、化粧行動を規定する化粧基準を検討する。
3. 化粧行動や化粧意識に関する研究で関連性が検討された自意識や他者意識といった個人差要因との関連性を検討する。

## II 研究の概要

### i 調査方法と調査時期、および調査対象者

関西の大学生を対象に、集合法で質問紙調査を実施した。なお、本調査は平松<sup>14)</sup> と同時に行った。

倫理的配慮として、調査票に研究の目的を明記し、回答は任意であり、無記名で個人が特定されることがないことを事前に口頭で説明した。

調査対象者は、男性329人 (平均年齢=18.80歳、標準偏差=1.16)、女性299人 (平均年齢=18.99歳、標準偏差=1.58) の合計628人 (平均年齢=18.73歳、標準偏差=1.21) であった。

## ii 調査内容

### 1) 自己の化粧程度と世間一般の化粧程度

平松・牛田<sup>15)</sup>の研究を参考に、21の社会的場面を選定した。

自己の化粧程度と世間一般の化粧程度のそれぞれについて、どの程度化粧を施すか、また世間一般的に考えてどの程度化粧を施すべきかを「まったく施さない／素颜(1)」から「パッチリ入念に／派手めに(5)」までの5件法で回答を求めた。

なお、化粧がどのような行動を指すかについては、平松<sup>16)</sup>が詳細にまとめている。だが、本研究では化粧の定義を、厚生労働省<sup>17)</sup>が定めた薬事法における「人の身体を清潔にし、美化し、魅力を増し、容貌を変え、又は皮膚若しくは毛髪を健やかに保つために、身体に塗擦、散布その他これらに類似する方法で使用されることが目的とされているもので、人体に対する作用が緩和なもの」と定義した。これに基づき、スキンケア、メイクアップ、フレグランスを化粧として扱い、具体的内容として化粧水、ファンデーション、マニキュア、ヘアスタイリング、香水などであることを調査対象者に口頭で説明した。

### 2) 化粧基準

福岡・高木・神山・牛田・阿部<sup>4)</sup>やKwon<sup>18)</sup> 19)の着装規範に関する研究における着装基準を参考に、20の化粧基準項目を選定した。

それぞれについて、自分自身にどの程度あてはまるかを「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で回答を求めた。

### 3) 自意識

自意識とは、自分自身への注意の向けやすさに関する性格特性である。自分の外見や他者に対する行動など外から見える自己の側面に対する注意を向ける程度の「公的自意識」、自分の内面や気分など外からみえない自分の側面に注意を向ける程度の「私的自意識」からなる。

本研究では、菅原<sup>20)</sup>の自意識尺度の21項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で得点化を行った。

確認のため因子分析(主因子法・Varimax回転)を行い、既存尺度と同じ2因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「自分を反省してみることが多い」「世間体など気にならない」「自分自身の内面のことには、あまり関心がない」をのぞく18項目で得点化した(公的自意識： $\alpha = 0.86$ 、私的自意識： $\alpha = 0.84$ )。

### 4) 他者意識

他者意識とは他者への注意、関心、意識が向けられた状態をいい、他者への注意の向けやすさに関する性格特性である。他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし理解しようとする意識や関心の程度である「内的他者意識」、他者の化粧、服装、体形、スタイルなどの外面に現れた特徴への注意や関心の程度である「外的他者意識」、他者について考え・空想をめぐらせその空想的イメージに注意を焦点付け、それを追いかける傾向の程度である「空想的他者意識」からなる。

本研究では、辻<sup>21)</sup>の他者意識尺度の15項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で得点化を行った。

確認のため因子分析(主因子法・Varimax回転)を行い、既存尺度と同じ3因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「人の言動には絶えず注意を払っている」「人のことをあれこれと考えていることが多い」をのぞく13項目で得点化した(内的他者意識： $\alpha = 0.86$ 、外的他者意識： $\alpha = 0.78$ 、空想的他者意識： $\alpha = 0.82$ )。

### 5) フェイス項目

年齢と性別を回答させた。

### 6) 統計処理

PASW Statistics 17.0を用いた。二者間の差の検定を行う場合、事前の手续として、Levene検定により等分散性を確認した。不等分散であった項目についてはAspin-Welchのt検定を行い、その他の項目についてはStudentのt検定を行った。

### Ⅲ 結果

#### 1) 自己と世間一般の化粧程度の平均値

自己と世間一般の化粧程度の各項目の評定平均値をみてみたい (TABLE 1) (TABLE 2)。

自己の化粧程度において、男性では「あまり施

さない」と全体を通じて回答している。相対的に、「恋人と外出する」「結婚式に出席する」などでは化粧の程度が高く、「自分の病気で病院に行く」「コンビニで買い物をする」などで化粧程度が低かった。他方、女性では「あまり施さない」や「やや入

TABLE1 自己化粧と世間一般の化粧程度の男女差

	自己の化粧程度				t値	有意確率	世間一般の化粧程度				t値	有意確率
	男性		女性				男性		女性			
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
アルバイトに行く	2.23	1.30	3.41	1.03	-11.98	***	3.12	1.04	3.46	0.85	-4.11	***
学校で授業を受ける	2.36	1.32	3.36	1.07	-9.89	***	2.99	1.02	3.33	0.87	-4.15	***
電車に乗る	2.22	1.28	3.15	1.03	-9.51	***	3.00	0.98	3.32	0.81	-3.96	***
家族と外出する	2.23	1.31	3.11	1.10	-8.58	***	3.01	1.00	3.29	0.90	-3.43	**
ボランティアで老人ホームに行く	1.96	1.16	2.59	1.00	-6.85	***	2.79	1.01	2.72	0.96	0.82	
自分の病気で病院に行く	1.85	1.12	2.08	1.02	-2.58	*	2.68	1.05	2.43	1.06	2.74	**
バスに乗る	2.14	1.25	3.01	1.06	-8.92	***	3.01	0.95	3.14	0.82	-1.72	
コンビニで買物をする	1.92	1.14	2.41	1.10	-5.23	***	2.85	1.05	2.92	0.92	-0.88	
恋人と外出する	2.85	1.66	4.06	1.04	-10.29	***	3.57	1.19	4.11	0.90	-5.91	***
ファミレスで食事をする	2.32	1.33	3.39	1.07	-10.41	***	3.13	0.98	3.44	0.79	-4.05	***
デパートで買物をする	2.31	1.32	3.58	1.07	-12.52	***	3.16	0.97	3.61	0.83	-5.66	***
結婚式に出席する	2.78	1.64	4.18	1.02	-12.11	***	3.55	1.18	4.15	0.89	-6.66	***
異性の友人と外出する	2.71	1.59	3.86	1.04	-10.14	***	3.46	1.14	3.99	0.86	-6.07	***
通夜・葬式に出席する	2.35	1.38	2.93	1.05	-5.64	***	3.09	1.15	3.03	0.93	0.71	
近所のスーパーで買物をする	1.96	1.14	2.48	1.09	-5.42	***	2.87	0.98	2.88	0.90	-0.08	
同性の友人と外出する	2.45	1.43	3.67	1.12	-11.30	***	3.20	1.01	3.66	0.85	-5.60	***
幼稚園児と接する	1.96	1.13	2.57	0.98	-6.84	***	2.79	0.98	2.65	0.95	1.75	
お見舞いで病院に行く	2.23	1.27	2.98	1.04	-7.67	***	3.03	0.99	3.04	0.90	-0.12	
異性との合コンに出席する	2.74	1.60	3.94	1.05	-10.45	***	3.55	1.16	4.13	0.91	-6.38	***
同窓会に出席する	2.69	1.56	3.96	1.06	-11.29	***	3.43	1.09	4.05	0.88	-7.11	***
バイトなどの面接を受ける	2.45	1.44	3.35	1.09	-8.36	***	3.21	1.05	3.49	0.91	-3.29	**

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

TABLE2 自己と世間一般の化粧程度差

	男性				t値	有意確率	女性				t値	有意確率
	自己化粧		世間一般				自己化粧		世間一般			
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
アルバイトに行く	2.28	1.31	3.13	1.03	-10.39	***	3.42	1.04	3.46	0.85	-0.72	*
学校で授業を受ける	2.39	1.32	2.98	1.01	-7.92	***	3.38	1.08	3.33	0.87	0.79	*
電車に乗る	2.26	1.29	3.00	0.96	-9.69	***	3.16	1.05	3.31	0.81	-2.41	**
家族と外出する	2.29	1.33	3.00	0.98	-8.80	***	3.12	1.14	3.30	0.90	-2.72	**
ボランティアで老人ホームに行く	2.00	1.17	2.79	1.00	-10.94	***	2.58	1.01	2.73	0.96	-2.30	**
自分の病気で病院に行く	1.88	1.14	2.67	1.04	-11.05	***	2.07	1.02	2.44	1.05	-5.77	***
バスに乗る	2.17	1.26	2.99	0.93	-11.18	***	3.02	1.08	3.15	0.82	-1.88	**
コンビニで買物をする	1.94	1.15	2.83	1.03	-11.67	***	2.40	1.13	2.93	0.92	-7.70	***
恋人と外出する	2.90	1.67	3.57	1.17	-6.29	***	4.11	1.03	4.11	0.90	0.00	
ファミレスで食事をする	2.39	1.34	3.11	0.96	-8.81	***	3.42	1.07	3.44	0.79	-0.25	
デパートで買物をする	2.37	1.34	3.15	0.96	-9.45	***	3.62	1.08	3.60	0.83	0.25	
結婚式に出席する	1.99	1.13	2.83	1.04	-10.99	***	2.54	1.01	2.70	0.96	-2.60	**
異性の友人と外出する	2.84	1.65	3.54	1.17	-6.58	***	4.25	0.99	4.14	0.89	1.47	*
通夜・葬式に出席する	2.78	1.59	3.46	1.13	-6.76	***	3.90	1.04	3.98	0.86	-1.31	*
近所のスーパーで買物をする	2.40	1.39	3.12	1.15	-8.72	***	2.94	1.05	3.03	0.93	-1.53	*
同性の友人との外出する	2.00	1.15	2.87	0.98	-11.61	***	2.46	1.12	2.89	0.90	-6.27	***
幼稚園児と接する	2.50	1.44	3.20	0.99	-8.25	***	3.70	1.14	3.65	0.85	0.81	*
お見舞いで病院に行く	2.00	1.14	2.80	0.97	-11.38	***	2.55	0.99	2.65	0.95	-1.70	**
異性との合コンに出席する	2.25	1.27	3.03	0.99	-9.48	***	2.98	1.04	3.04	0.90	-0.99	*
同窓会に出席する	2.78	1.60	3.56	1.15	-7.52	***	4.00	1.03	4.12	0.91	-1.75	**
バイトなどの面接を受ける	2.73	1.56	3.45	1.08	-7.26	***	4.03	1.03	4.04	0.88	-0.17	

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

念に施す」まで多岐に回答している。相対的に、「結婚式に出席する」「恋人と外出する」などで化粧の程度が高く、「自分の病気で病院に行く」「コンビニで買い物をする」などで化粧程度が低かった。

男女差をt検定で検討した。すると、すべての項目で有意な男女差が認められ、男性よりも女性の方が化粧程度が高かった。

世間一般の化粧程度において、男性では「あまり施さない」から「どちらともいえない」と回答している。相対的に、「恋人と外出する」「結婚式に出席する」「異性との合コンに出席する」では世間一般の化粧の程度が高く、「ボランティアで老人ホームに行く」「幼稚園児と接する」で世間一般の化粧程度が低かった。他方、女性では「どちらともいえない」から「やや入念に施す」と回答している。相対的に、「恋人と外出する」「結婚式に出席する」「異性との合コンに出席する」では世間一般の化粧程度が高く、「自分の病気で病院に行く」「幼稚園児と接する」「ボランティアで老人ホームに行く」で世間一般の化粧程度が低かった。

男女差をt検定で検討した。すると、「ボランティアで老人ホームに行く」「バスに乗る」「コンビニで買い物をする」「通夜・葬式に出席する」「近所のスーパーで買い物をする」「幼稚園児と接する」「お見舞いで病院に行く」では有意な男女差が認められなかったものの、それ以外の項目では有意な男女差が認められ、男性よりも女性の方が世間一般の化粧の程度が高かった。

男女別に、自己と世間一般の化粧程度の各項目の差を、t検定で検討した。すると、男性ではすべての項目で有意差が認められ、世間一般の化粧程度が自己の化粧程度を上回っていることがわかった。他方、女性では「恋人と外出をする」「ファミレスで食事をする」「デパートで買い物をする」「バイトなどの面接を受ける」については、有意差が認められなかったものの、「学校で授業を受ける」「異性の友人と外出をする」「幼稚園児と接する」では自己の化粧程度が世間一般の化粧程度を上回り、それ以外の項目については自己の化粧程度が世間一般の化粧程度を下回った。

## 2) 自己と世間一般の化粧程度の構造

自己の化粧程度と世間一般の化粧程度の構造を明らかにするため、各項目の評定点をもとに主成分分析を行った。自己と世間一般のそれぞれで同様の構造が明らかとなったため、over-allの主成分分析(Varimax回転)を行った。

その結果(TABLE 3)、Kaiser-Guttmanによる最低固有値1.0を基準に「同窓会」「異性との合コン」などからなる『公的場面』(自己の化粧程度:  $\alpha = .98$ 、世間一般の化粧程度:  $\alpha = .95$ )、「自分の病気で病院に行く」「幼稚園児と接する」などからなる『私的場面』(自己の化粧程度:  $\alpha = .96$ 、世間一般の化粧程度:  $\alpha = .94$ )と命名した2因子が抽出された。

この2因子で簡便因子得点(各因子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法)を算出し、分析データとした。

TABLE3 化粧程度の主成分分析  
(over-all・Varimax回転)

	公的場面	私的場面
同窓会に出席する	0.92	0.22
異性との合コンに出席する	0.92	0.21
結婚式に出席する	0.91	0.19
恋人と外出する	0.91	0.21
異性の友人と外出する	0.90	0.26
同性の友人と外出する	0.82	0.39
デパートで買物をする	0.79	0.46
ファミレスで食事をする	0.73	0.54
バイトなどの面接を受ける	0.68	0.47
学校で授業を受ける	0.67	0.56
アルバイトに行く	0.66	0.51
自分の病気で病院に行く	0.07	0.87
幼稚園児と接する	0.26	0.86
近所のスーパーで買物をする	0.26	0.85
ボランティアで老人ホームに行く	0.28	0.83
コンビニで買物をする	0.26	0.82
バスに乗る	0.54	0.72
お見舞いで病院に行く	0.54	0.67
電車に乗る	0.60	0.66
家族と外出する	0.59	0.63
通夜・葬式に出席する	0.50	0.59
固有値	9.18	7.41
累積寄与率 (%)	43.70	78.99

次に、明らかとなった各因子の男女差をt検定で検討した (TABLE 4)。

その結果、世間一般の化粧程度の『私的場面』では有意な男女差が認められなかったものの、その他の項目については男性の方が女性よりも程度が低かった。

### 3) 化粧基準の平均値

化粧基準の各項目の評定平均値をみてみたい (TABLE 5)。

男性は、ほとんどの項目について、「どちらともいえない」と回答している。相対的に、「自分の好みに合っている」「簡単にできる」「自分の魅力がアップできる」などを基準にしていると回答

TABLE4 自己化粧の程度と世間一般の化粧程度の各因子の男女差

		男性		女性		t値	有意確率
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
自己	公的場面	2.53	1.35	3.71	0.90	-12.06	***
自己	私的場面	2.08	1.09	2.74	0.83	-7.92	***
世間	公的場面	3.28	0.92	3.76	0.65	-6.76	***
世間	私的場面	2.91	0.87	2.95	0.65	-0.55	

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

TABLE5 化粧基準の男女差

	男性		女性		t値	有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
自分の品位を傷つけない	3.04	1.25	3.42	1.00	-4.01	***
流行に合っている	2.75	1.16	3.23	1.03	-5.19	***
お金がかからず経済的	3.16	1.27	3.44	1.12	-2.79	**
自分の魅力がアップできる	3.22	1.20	3.89	0.82	-7.75	***
場所柄や雰囲気合っている	3.05	1.19	3.74	0.90	-7.86	***
目新しく、人目をひく	2.74	1.13	3.00	1.06	-2.83	**
自分の好みにあっている	3.38	1.29	3.99	0.91	-6.53	***
自分を引き立てる	3.21	1.19	3.82	0.85	-7.05	***
内面を引き出す	2.83	1.05	3.25	0.93	-4.98	***
簡単にできる	3.26	1.25	3.85	0.92	-6.47	***
自分らしさが表現できる	3.06	1.16	3.61	0.96	-6.19	***
伝統やしきたりに合っている	2.47	1.10	2.55	0.99	-0.89	
つけ心地がよい	2.96	1.23	3.48	1.05	-5.39	***
周囲の人に失礼にならない	3.13	1.18	3.63	0.97	-5.55	***
周囲の人と同じ化粧である	2.44	1.04	2.82	1.01	-4.40	***
時節(季節)にあっている	2.87	1.14	3.30	1.03	-4.72	***
自分の性や年齢にあっている	3.11	1.24	3.73	0.96	-6.66	***
自分の社会的地位・立場にふさわしい	2.93	1.15	3.58	0.95	-7.21	***
周囲の人から信用を損なわない	3.02	1.20	3.54	0.99	-5.68	***
若々しく見える	2.94	1.18	3.28	1.08	-3.57	***

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

し、「周囲の人と同じ化粧である」「伝統やしきたりにあっている」などを基準にしていなと回答している。

女性は、ほとんどの項目について、「ややあてまる」と回答している。相対的に、「自分の好みに合っている」「自分の魅力がアップできる」などを基準にしていると回答し、「周囲の人と同じ化粧である」「伝統やしきたりにあっている」などを基準にしていなと回答している。

化粧基準の男女差を検討するため、t検定を行った。

その結果、「伝統やしきたりにあっている」では有意な男女差が認められなかったものの、その他の項目では男性が女性よりも「あてはまらない」と回答していた。

#### 4) 化粧基準の構造

化粧基準の構造を明らかにするため、各項目の評定をもとに主成分分析 (Varimax 回転) を行

った。

その結果 (TABLE 6)、Kaiser-Guttmanによる最低固有値1.0を基準に「自分を引き立てる」「自分の好みにあっている」などからなる『個性』( $\alpha = .92$ )、「周囲の人から信用を損なわない」「自分の社会的地位・立場にふさわしい」などからなる『社会的調和』( $\alpha = .93$ )、「周囲の人と同じ化粧である」「伝統やしきたりにあっている」などからなる『他者同調』( $\alpha = .83$ )と命名した3因子が抽出された。

この3因子で簡便因子得点 (各因子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法) を算出し、分析データとした。

次に、明らかとなった各因子の男女差をt検定で検討した (TABLE 7)。

その結果、すべての項目で有意な男女差が認められ、男性は女性に比べ「あてはまらない」と回答していた。

TABLE6 化粧基準の主成分分析 (Varimax 回転)

	個性	社会的調和	他者同調
自分を引き立てる	0.81	0.41	0.16
自分の好みにあっている	0.77	0.49	0.05
自分らしさが表現できる	0.76	0.29	0.28
自分の魅力がアップできる	0.75	0.43	0.19
内面を引き出す	0.64	0.21	0.48
自分の品位を傷つけない	0.56	0.47	0.19
つけ心地がよい	0.52	0.39	0.38
周囲の人から信用を損なわない	0.26	0.79	0.36
自分の社会的地位・立場にふさわしい	0.24	0.79	0.38
周囲の人に失礼にならない	0.36	0.77	0.21
自分の性や年齢にあっている	0.36	0.75	0.32
簡単にできる	0.52	0.62	0.00
場所柄や雰囲気に合っている	0.56	0.57	0.30
お金がかからず経済的	0.46	0.54	0.15
時節 (季節) にあっている	0.31	0.52	0.49
周囲の人と同じ化粧である	0.05	0.25	0.80
伝統やしきたりに合っている	0.06	0.16	0.75
若々しく見える	0.35	0.37	0.62
目新しく、人目をひく	0.56	0.06	0.62
流行に合っている	0.51	0.20	0.55
固有値	5.36	5.03	3.60
累積寄与率 (%)	26.80	51.98	69.97

TABLE7 化粧基準因子の男女差

	男性		女性		t値	有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
同調	3.09	1.03	3.64	0.67	-7.45	***
社会的調和	3.06	1.03	3.61	0.70	-7.41	***
他者同調	2.67	0.92	2.98	0.73	-4.37	***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

TABLE8 自己の化粧程度を規定する世間一般の化粧程度

	男性		女性	
	自己 公的場面	自己 私的場面	自己 公的場面	自己 私的場面
世間 公的場面	0.40 ***		0.38 ***	
世間 私的場面		0.46 ***		0.48 ***
決定係数 $R^2$	0.16 ***	0.21 ***	0.15 ***	0.23 ***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

TABLE9 自己の化粧程度を規定する化粧基準

	男性		女性	
	自己 公的場面	自己 私的場面	自己 公的場面	自己 私的場面
個性	0.48 ***	0.42 ***	0.32 ***	0.21 **
社会的調和			0.23 **	-0.34 ***
他者同調			-0.18 *	0.39 ***
決定係数 $R^2$	0.23 ***	0.17 ***	0.13 ***	0.17 ***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

TABLE10 自己の化粧程度を規定する個人差要因

	男性		女性	
	公的場面	私的場面	公的場面	私的場面
公的自意識	0.23 ***	0.17 **		
私的自意識				
内的他者意識				
外的他者意識			0.39 ***	0.24 ***
空想的他者意識				
決定係数 $R^2$	0.05 ***	0.03 **	0.15 ***	0.05 ***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

5) 自己の化粧程度を規定する世間一般の化粧程度

自己の化粧程度を規定する世間一般の化粧程度を明らかにするため、男女別に自己の化粧程度の各因子のそれぞれを目的変数とし、世間一般の化

粧程度の各因子を説明変数とする重回帰分析をStepwiseによる変数選択法で行った。

その結果 (TABLE 8)、男女共通して、自己の化粧程度の『公的場面』を規定する世間一般の化粧程度として『公的場面』が、自己の化粧程度の



『私的場面』を規定する世間一般の化粧程度として『私的場面』が有意に選択された。

#### 6) 自己の化粧程度を規定する化粧基準

自己の化粧程度を規定する化粧基準を明らかにするため、自己の化粧程度の各因子を目的変数とし、化粧基準の各因子を説明変数とする重回帰分析をStepwiseによる変数選択法で行った。

その結果 (TABLE 9)、男性では、自己の化粧程度の『公的場面』『私的場面』を規定する化粧基準として『個性』が有意に選択された。女性では、自己の化粧程度の『公的場面』『私的場面』を規定する化粧基準として『個性』『社会的調和』『他者同調』が有意に選択された。

#### 7) 自己化粧の程度を規定する個人差要因

自己の化粧程度を規定する個人差要因を明らかにするため、自己の化粧程度の各因子を目的変数とし、自意識や他者意識の各因子を説明変数とする重回帰分析をStepwiseによる変数選択法で行った。

その結果 (TABLE 10)、男性では自己の化粧程度の『公的場面』『私的場面』を規定する個人差要因として『公的自意識』が有意に選択された。女性では自己の化粧程度の『公的場面』『私的場面』を規定する個人差要因として『外的他者意識』が有意に選択された。

## IV 考察

### 1) 自己と世間一般の化粧程度

自己の化粧程度について、程度に差はあるものの男女共通して、「恋人と外出をする」「結婚式に出席する」「異性との合コンに出席する」などの場面で化粧程度が高く、「自分の病気で病院に行く」「コンビニで買い物をする」「ボランティアで老人ホームに行く」などで化粧程度が低いことが明らかとなった。

また、世間一般の化粧程度について、自己の化粧程度とほぼ同様に、程度に差はあるものの男女共通して、「恋人と外出をする」「結婚式に出席する」「異性との合コンに出席する」などの場面で

化粧程度が高く、「自分の病気で病院に行く」「コンビニで買い物をする」「ボランティアで老人ホームに行く」などで化粧程度が低いことが明らかとなった。

すなわち、自己の化粧程度も世間一般の化粧程度も、状況としてハレの場面であり、異性が存在する比較的相互作用が活発に行われる場面で化粧程度が高いのに対し、他者との相互作用が消極的な場面では化粧程度が低いことがわかった。

程度の差について、男性ではすべての項目で自己の化粧程度が世間一般の化粧程度を下回った。女性では、「学校で授業を受ける」で自己の化粧程度が世間一般の化粧程度を上回ったものの、差が認められたその他の項目については、自己の化粧程度が世間一般の化粧程度を下回った。

すなわち、男性では世間一般として、より化粧を施すべきと考えていながら、実際の化粧行動は、あまり施していないことがわかった。また、女性は「学校で授業を受ける」について世間一般の化粧程度より、実際の化粧程度は入念に行われ、その他の差の認められた項目は、より化粧を施すべきと考えていながら、実際の化粧行動は、あまり施していないことがわかった。

女性では、「学校で授業を受ける」について世間一般の化粧程度より、実際の化粧程度は入念に行われている。その理由として、今回の調査対象者が大学生1～2年生が中心であったことが考えられる。すなわち、高校生時代の化粧はあまりするべきではないという意識を世間一般の化粧程度として引き続き維持しながらも、日常生活のなかで多くを占める相互作用を行う場が学校であることから、実際の化粧は入念に行われていると推測される。

主成分分析により構造化を試みたところ、自己の化粧程度と世間一般の化粧程度に共通して『公的場面』と『私的場面』という他者との相互作用の促進・抑制される場面によって構造化された。平松・牛田<sup>10)</sup>が、対人接触や場面の公私の高さを主として、化粧を施す生活場が構造化されることを明らかにしているが、本知見は同様の結果となった。しかしながら、公衆場面での実際の化

粧行動について平松<sup>14)</sup>は、特定・不特定の他者の存在により構造化されることを明らかにしている。このことから、どの程度化粧を行うかについては場面の公私が問題となり、その場面で化粧や化粧直しをするかについては知っている特定の他者の存在が影響していると推測される。

## 2) 化粧基準

化粧基準について、程度に差はあるものの、相対的に男女共通して「自分の好みに合っている」「自分の魅力がアップできる」などを基準とし、「伝統やしきたりにあっている」「周囲の人と同じ化粧である」を基準としていないことが明らかとなった。

永尾<sup>22)</sup>は、化粧をする理由として首都圏在住の15歳以上の女性1,248名を対象に調査を行い、10歳代の女性では「美しくみせたい」「創作するのが楽しい」が特徴であるのに対し、年齢の上昇とともに「気分が引き締まる」「社会的エチケット」が特長として現れてくることを指摘している。これは、若年齢層ほど化粧を楽しむとして、また装飾的行動として捉えていることを意味している。本研究の知見は、永尾の指摘を裏づけるものとなった。

主成分分析により構造化を試みたところ、『個性』『社会的調和』『他者同調』という自己顕示的な基準と社会同化的な基準が明らかとなった。

着装規範に関する研究<sup>4)</sup>では、着装基準として、『個性・流行性』『実用性』『社会的調和』の3因子が明らかにされている。

着装基準における『個性・流行性』は、本研究で明らかとなった化粧基準の『個性』と対応するものであると考えられる。だが、着装基準における『社会的調和』は、「自分の社会的地位にふさわしい」といった自己に基準がおかれるのか、もしくは「周囲の人と同じ化粧である」といった他者に基準がおかれるのかといった違いにより、『社会的調和』と『他者同調』に化粧基準では構造が分かれたと推測される。

## 3) 自己の化粧程度を規定する世間一般の化粧程度

男女とも、世間一般の化粧程度の『公的場面』が自己の化粧程度の『公的場面』を、世間一般の化粧程度の『私的場面』が自己の化粧程度の『私的場面』を規定していることが明らかとなった。

すなわち、世間一般的に『公的場面』や『私的場面』でどの程度化粧を施すべきかという化粧程度が、実際にそれぞれの場面における化粧程度に影響を与えている。これは、生活場面での化粧程度が個人の嗜好によって決定されているのではなく、外部にその基準があることを意味している。

## 4) 自己の化粧程度を規定する化粧基準

男性の自己の化粧程度を規定する化粧基準として『公的場面』『私的場面』に共通して、『個性』が有意に選択された。

平松・牛田<sup>23)</sup>が化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待について検討し、男性は自らの化粧関心の高まりから実際の化粧行動を行っているものの、男性の化粧行動に対する女性からの化粧期待が低いことを明らかにしている。さらに平松・牛田<sup>24)</sup>は、化粧意識と化粧行動の関連性を検討し、男性の化粧行動には『魅力向上・気分高揚』の意識が関連することを明らかにしている。このことから、自己の化粧程度を規定する化粧基準についても、相対的に自己顕示的であり、主体的な楽しみとしての基準である『個性』が影響していると推測される。

女性の自己の化粧程度を規定する化粧基準として『公的場面』『私的場面』に共通して、『個性』『社会的調和』『他者同調』が有意に選択された。

平松・牛田<sup>23)</sup>が化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待について検討したなかで、女性は自らの化粧関心の高まりから実際の化粧行動を行っていると同時に、女性の化粧行動に対する男性からの化粧期待が高いことを明らかにしている。また、平松・牛田<sup>24)</sup>は、化粧意識と化粧行動の関連性を検討したなかで、女性の化粧行動には『魅力向上・気分高揚』『必需品・身だしなみ』の意識が関連することを明らかにしている。『必需品・身

だしなみ』の化粧意識が相対的に社会からの化粧期待と関連していることから、『個性』だけではなく『社会的調和』『他者同調』が影響していると推測される。

興味深いことに、女性の『公的場面』について『社会的調和』は正に、『他者同調』は負に、『私的場面』について『社会的調和』は負に、『他者同調』は正に影響を与えている。すなわち、『公的場面』と『私的場面』ではフォーマリティに差があること、「同窓会に出席する」「異性との合コンに出席する」と「自分の病気で病院に行く」「幼稚園児と接する」といったように、状況や相互作用の目的の違いが影響しているのではないかと推測される。

#### 5) 自己の化粧程度を規定する個人差要因

男性では、公的自意識の高さが自己の化粧程度の『公的場面』『私的場面』を規定していた。

すなわち、自分の外見や他者に対する行動など外から見える自己の側面に対する注意を向ける程度の高い者ほど、自己の化粧程度が場面に共通して高いことが明らかとなった。これは自己の化粧程度に化粧基準の『個性』が影響していることから、他者から自己がどのように見られているかという意識が化粧程度に影響を与えていると推測される。

女性では、外的他者意識の高さが自己の化粧程度の『公的場面』『私的場面』を規定していた。

すなわち、他者の化粧、服装、体形などの外面に現れた特徴への注意や関心の程度が高い者ほど、自己の化粧程度が場面に共通して高いことが明らかとなった。これは、自己の化粧程度に化粧基準の『個性』だけではなく、『社会的調和』『他者同調』が影響していることから、他者どのような化粧をしているかを気にする意識が、化粧程度に影響を与えていると推測される。

## V まとめ

本研究の目的は、社会的場面での化粧行動の程度に関する、実際の行動と世間一般の許容の対応関係について検討することであった。また、社会

的場面で重視される化粧基準の構造を示し、社会的場面での化粧行動を規定する化粧基準を検討することであった。そして、化粧行動や化粧意識に関する研究で関連性が検討された自意識や他者意識といった個人差要因と、社会的場面での実際の化粧行動の程度との関連性を検討することであった。

結果を要約すると次の通りとなる。

1. 自己の化粧程度と世間一般の化粧程度は、共通して『公的場面』と『私的場面』に構造化された。化粧基準は、『個性』『社会的調和』『他者同調』に構造化された。
2. 男女共通して、自己の化粧程度の『公的場面』に世間一般の化粧程度としての『公的場面』が、自己の化粧程度の『私的場面』に世間一般の化粧程度としての『私的場面』が関連していた。
3. 男性では、自己の化粧程度の『公的場面』『私的場面』に化粧基準の『個性』が規定していた。女性では、自己の化粧程度の『公的場面』『私的場面』に化粧基準の『個性』『社会的調和』『他者同調』が規定していた。
4. 男性では、公的自意識の高さが自己の化粧程度の『公的場面』『私的場面』に影響していた。女性では、外的他者意識の高さが自己の化粧程度の『公的場面』『私的場面』に規定していた。

今後の課題として、世代間の比較検討が必要である。すなわち、永尾が、年齢の変化とともに化粧をする理由に変化がみられることを指摘しているが、これは化粧が「個人的なおしゃれ」から「社会的規範」へと変化し、固定化されていくことのためであり、その点において、化粧を施す社会的場面や化粧基準について世代間の変化を検討することは無視できない。

## 引用・参考文献

- 1) 中川早苗 1984 衣生活システムの理論的・実証的研究 (第2報) サラリーマンの服装に対する規範意識の構造、家政学雑誌、35(4)、253-260
- 2) 中川早苗 1986 衣生活システムの理論的・実証的

- 研究(第3報)女子大生の生活場面と着装基準に関する研究、家政学雑誌、37(5)、397-403
- 3) 西藤栄子・中川早苗 2004 中高年女性のおしゃれ意識と規範意識、日本家政学会誌、55(9)、743-751
- 4) 福岡欣治・高木修・神山進・牛田聡子・阿部久美子 1998 着装規範に関する研究(第1報)―生活場面と着装基準の関連性―、繊維製品消費科学、39(11)、42-48
- 5) 牛田聡子・高木修・神山進・阿部久美子・福岡欣治 1998 着装規範に関する研究(第2報)―場面と基準の関連性を規定する個人差要因―、繊維製品消費科学、39(11)、49-55
- 6) 阿部久美子・高木修・神山進・牛田聡子・辻幸恵 2000 着装規範に関する研究(第3報)―生活場面と着装基準の評定に基づく着装規範意識の構造化―、繊維製品消費科学、41(11)、11-16
- 7) 牛田聡子・高木修・神山進・阿部久美子・辻幸恵 2000 着装規範に関する研究(第4報)―着装規範意識を規定する個人差要因(自意識・形式主義・社会的スキル)―、繊維製品消費科学、41(11)、17-24
- 8) 辻幸恵・高木修・神山進・阿部久美子・牛田聡子 2000 着装規範に関する研究(第5報)―着装規範の親子間の対応性に及ぼす親子関係の影響―、繊維製品消費科学、41(11)、25-32
- 9) 阿部久美子・高木修・神山進・牛田聡子・辻幸恵 2001 着装規範に関する研究(第6報)―子どもの着装規範意識に及ぼす親の影響―、繊維製品消費科学、42(11)、18-27
- 10) 辻幸恵・高木修・神山進・牛田聡子・阿部久美子 2001 着装規範に関する研究(第7報)―着装規範同調・逸脱がもたらす感情と規範意識高低による差異―、繊維製品消費科学、42(11)、28-34
- 11) 牛田聡子・高木修・神山進・阿部久美子・辻幸恵 2001 着装規範に関する研究(第8報)―着装規範同調・逸脱がもたらす着装感情を規定する個人差要因(自意識・自尊心・独自性欲求)―、繊維製品消費科学、42(11)、35-42
- 12) 辻幸恵・高木修・神山進・牛田聡子・阿部久美子・房岡純子 2002 着装規範に関する研究(第9報)―規範的着装行動に対する他者反応と着装感情の関係―、繊維製品消費科学、43(11)、57-64
- 13) 牛田聡子・高木修・神山進・阿部久美子・辻幸恵・房岡純子 2002 着装規範に関する研究(第10報)―規範的着装行動に対する他者反応と着装感情の関係とその個人差―、繊維製品消費科学、43(11)、65-74
- 14) 平松隆円 2010 公衆場面での化粧行動への社会的是非と個人差要因の関連性、ファッションビジネス学会誌、15、33-42
- 15) 平松隆円・牛田聡子 2008 化粧規範に関する研究―化粧を施す生活場面とそれを規定する化粧意識と個人差要因―、繊維製品消費科学、48(12)、59-68
- 16) 平松隆円 2009 『化粧にみる日本文化―だれのためによそおうのか』水曜社
- 17) 厚生労働省 2006 『薬事法』改正平成18年6月21日法律84号
- 18) Yoon-Hee Kwon 1987 Daily Clothing Selection: Interrelationships Among Motivating Factors, *Clothing and Textiles Research Journal*, 5(2), 21-27
- 19) Yoon-Hee Kwon 1988 Effects of Situational and Individual Influences on the Selection of Daily Clothing, *Clothing and Textiles Research Journal*, 6(4), 6-12
- 20) 菅原健介 1984 自意識尺度日本語版作成の試み、心理学研究、55、184-188
- 21) 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識、北大路書房
- 22) 永尾松夫 1983 女性における化粧意識、化粧文化、8、133-144
- 23) 平松隆円・牛田聡子 2003 化粧に関する研究(第1報)―大学生の化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待の構造解明―、繊維製品消費科学、44(11)、58-68
- 24) 平松隆円・牛田聡子 2004 化粧に関する研究(第3報)―大学生の化粧意識の構造解明と化粧行動との関連性―、繊維製品消費科学、45(11)、53-62